

良忠上人

◆ 目次 ◆

1	お誕生から幼年時代……………	2
2	出家——お念仏への想いと迷い……………	6
3	聖光上人の下へ……………	9
4	布教の旅へ……………	13
5	鎌倉での布教……………	18
6	京都へ……………	21
7	後継者を決め、お浄土へ……………	23

法然上人ほうねんが開かれたお念仏の教えは、浄土宗第二祖の聖光上人に引き継つがれました。その教えを受け継いだのが、今回の主人公である良忠上人りょうちゆうです。良忠上人は、受け継いだお念仏を広めるとともに多くの弟子を育て、また、聖光上人に期待された浄土宗の基礎確立の実現に報いようと「報夢鈔ほうむしやう」五〇余帖と言われるほど多くの著作を残しました。どれも浄土宗の教えを学問的に裏付けるようなものばかりです。浄土宗の基礎を学問的に確立し、お念仏の生活化を定着させたと言っても過言ではないでしょう。こうした著述に対して、「記主禪師きしゅぜんじ」という名も授けられています。

では、この良忠上人とはどんな方だったのでしょうか。その足跡を追いながら、見ていきましょう。

1 お誕生から幼年時代

浄土宗の第三祖良忠上人は、鎌倉時代前期の一一九九年（正治元）七月二十七日、石見国三隅莊いわみのくにみすみのしょう（現・島根県浜田市三隅町）で生まれました。

父は円尊えんそん、母は伴氏出身の方と伝えられています。

良忠上人には、他の高僧などによくある誕生時の奇瑞は伝えられていません。伝記には、「幼いころは性質知識が常人をこえてすばらしく、人々はこれを見てほめ讃えた」とあります。後年、法然上人から第二祖聖光上人へと伝えられた浄土宗のお念仏の正統を学問的に証明、基礎づけ、確立した良忠上人の片鱗は、この当時から表れていたと言っているでしょう。

一二〇九年（承元三）、十一歳の時、三智法師という僧もとが父の下に来て、平安時代中期の天台僧惠心えしん僧都そう源信げんしんが著した『往生要集』おうじょうようしゅうの講義をしたのですが、上人はこの講義を部屋の間で聞いていました。「この世で悪いこ



とをした人は苦しみの世界へいかなければならないが、善いことをした人は浄土に生まれることができる。この世は悪がはびこり苦しみに満ちているが、浄土は楽しみにあふれている」と法師は説いていきます。『往生要集』は、迷いと苦であるこの世を嫌って、苦のない阿弥陀仏の極楽浄土に往生することを願うという内容が書かれた書物で、そこには悪い行いの種類により堕ちるさまざまな地獄の様子などもリアルに描かれています。

当時の人の来世を信じる気持ちは、

今日の人とはかけ離れて強く、仏教美術や文学などにもその想いが多く見られます。

十一歳の上人は、耳にする恐ろしい地獄の様相に、「地獄へ堕ちるようなことをしてはいけない」と、幼な心に浄土への想いを強くしました。

この二年後の一二一年（建暦元）、十三歳になった良忠上人は、出雲国（現・島根県出雲市）の鰐淵寺がくえんじに入り、信暹しんせんという僧に師事します。

鰐淵寺は当時の山陰地方では学問や修行をする霊山として知られていた天台宗の寺院です。

当時の上人には次のような逸話が伝えられています。

師匠の信暹から經典を習ったとき、上人は一度に八十行も暗誦してしまったとか、また翌年の元日、上人は、

五濁ごじよくの憂き世うまに生れしは、恨みかたがた多けれど、念仏往生と聞くと